「秘曲」

平岩弓枝

御宿

能楽師・鷺流宗家一子相伝の秘曲「鷺」を伝授された先代の隠し子に危険が迫る。事件の後、東吾は三年前の奇妙な夜を呼び起こす母子とすれ違う。二人の隠し子に揺れる大川端模様。表題作他七篇。

人気の[御宿かわせみ]シリーズ第15巻

文藝春秋刊❖定価1100円(本体1068円)

「秘曲」

平岩弓枝

御宿かわせみ

文藝春秋

秘曲・御宿（おんやど）かわせみ

一九九三年七月十五日　第一刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　平岩弓枝

発行者　阿部達児

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表（〇三）三二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷
製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁のあった場合は送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

© Yumie Hiraiwa 1993

Printed in Japan
ISBN4-16-314100-6

目次

念仏踊りの殺人……5
松風の唄……34
おたぬきさん……62
江戸の馬市……93
冬の鴉……125
目籠ことはじめ……154
秘曲……185
菜の花月夜……219

装画　佐多芳郎

AD　多田　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秘曲・御宿かわせみ

初出　「オール讀物」平成4年7月号〜5年4月号
（9月号と2月号をのぞく）

念仏踊りの殺人

一

大川端の小さな旅宿「かわせみ」で働いている女中のおたまが五日ばかり休みを頂きたいと、るいに申し出たのは、父親の新盆に故郷から帰って来いと便りが来たからである。

もともと、るいは七月になったら、おたまに休みを与えるつもりであった。

この春、おたまの故郷から知らせがあって父親が卒中で急死した際、るいがすぐにも帰るようにいったのに、

「お父つぁんが生きている中なら、お暇をもらってかけつけますが、もう歿って三日も経っているんです。手紙にも野辺送りは済んだとありますし、おっ母さんと妹がなにもかもいいようにしてくれたと思いますので……」

今更、行っても仕方がないと強くいい張って、結局、戻らなかった。

おたまがそういった理由の一つは、ちょうど奉公人の出がわりの時期で、「かわせみ」でも若い女中が二人、嫁入りのために暇を取って去り、その代りが思うようにみつからなくて、るいと女中頭のお吉が困り切っているのを承知していたせいである。

「普段は素直な子ですけれど、これと決めていい出したらきかないところがあるんです。当人がいっていましたが、おっ母さんというのが生さぬ仲で、妹ってのはその母親の子なんだそうで、江戸へ奉公に来たのも、家に居づらい事情があったようで、無理に帰してやっても、かえってつらい思いでもするんだと可哀相ですよ」

とお吉がいい、むしろ、新盆に墓まいりに行かせてやってはと勧めたことでもある。

おたまの故郷は木更津から少し入った清川村というところだという。

木更津までは舟の便があるが、往復でおよそ二日余りが消えてしまう。

「五日といわず、折角だから、盆祭の間、ゆっくりしてお出でなさい。いろいろと顔出ししなければならないところもあるだろうし」

るいはおたまに、父親への香典包を渡し、その他にも土産物などを充分すぎるほど持たせ、若い衆に木更津通いの舟の出る河岸まで送らせた。

そして十日。

「ぼつぼつ、おたまちゃん、帰って来そうなものですね」

お吉がまず口に出した。

すでに盆が終って三日が過ぎている。

「法事もあることだし、三年ぶりに帰ったのだもの。なにかと用事もあるでしょう」
父親が歿って、継母と腹違いの妹だけになっているおたまの実家である。
「親類が、さきざきの相談なんかをなすってるんじゃありませんかね。おたまちゃんも十八だ。嫁に出すにせよ、聟を取るにせよ、決して早いことはねえんですから……」
番頭の嘉助は、そっちに気を廻している。
そして二日、漸く、木更津から使が来た。
「おたまさんが殺されたんです。盆祭の日で……もっと早くにお知らせしなけりゃならねえところでしたが、なにしろ、えらいさわぎでして……」
ちょうど東吾も家にいて、
「誰に殺されたんだ」
驚きの余り、声も出ないでいるるいに代って訊いた。
「そいつが、わかりませんので……」
「下手人は挙っていないのか」
「へえ、お役人が調べていますが、一向に埒があきません」
村では、妹のお梅と間違えて殺されたんじゃないかという噂だがと、使の男は当惑気味に話した。
「あたし、木更津まで行って来ます。あんないい子が殺されるなんて、冗談じゃない。いったい、誰がなんのために殺したのか、はっきりさせてやらないと、おたまちゃんだってうかばれやしません」

るいがいきり立ち、
「まあ、俺達が出かけて行っても、下手人が挙るかどうかわからないが、せめて、るいの気のすむように、線香の一本も上げてやって来よう」
女房に甘い東吾が、その気になった。
使の男を案内に、早速、その夜の木更津通いの舟に乗る。
海路は穏やかであった。
もっとも、江戸から木更津までは、海の両側に房総半島と三浦半島がせり出していて、まるで大きな池の中を行くようなものだから嵐でも来ない限り、そう大きな波は来ない。
案内役の若い男は、清川村の名主の小作人で吾市といい、東吾に訊かれるままに少しずつ、事件の当日の話をはじめた。
清川村には古くから盆祭の日に念仏踊りを催す習慣があった。
「在所の若い娘が白い頭巾の上から花笠をつけまして鼓(さいら)を打ち鳴らして踊りますんで、村中、総出で鎮守の社(やしろ)へ集って見物しますだ」
その踊り子の一人に、おたまの妹のお梅がえらばれていた。
「おたまは、踊り子ではなかったのか」
と東吾が口をはさみ、吾市が首を振った。
「踊り子は在所の娘だけで、他国へ奉公に行った者は盆休みに帰って来ても加わらねえです……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一つには、踊りの稽古が間に合わないからしい。
にもかかわらず、死体で発見されたおたまは、念仏踊りの衣裳をつけていた。
「お梅さんの話だと、鎮守の社へ行く途中、どうにも腹が痛みだして動けねえ。それでもって、おたまさんに代ってもらうことにして、おたがいの衣裳を取り替え、自分は林の中で暫く休んでから家へ帰ったといいますだ。おたまさんは江戸へ奉公に出る前に念仏踊りの踊り子をつとめたことがあるので、まあ、なんとか踊れるといったそうだが……」
「おたまは鎮守へ行ったのか」
「いや、その途中の閻魔堂の裏で殺されたでねえ……」
死体がみつかったのは、翌朝になってだといった。
「殺されたというが、それは刃物か、それとも……」
「刃物で……体中、血まみれで倒れていたですから……」
るいがまっ青になっているのは、舟の僅かな揺れのせいではないと気がついて、東吾は訊くのを中止した。
海の上には少し欠けはじめた月が出ていて風が涼しい。
東吾は振り分け荷物の中から合羽を出してるいの肩にかけてやった。
木更津で朝飯をすませ、るいのために駕籠をやとって清川村へ着いた。
吾市がまず、おたまの実家へ東吾夫婦をつれて行く。
農家だが、暮しむきは悪くなさそうであった。

吾市の話では、死んだおたまの父の与兵衛が働き者で親の代からの田畑を少々増やし、かなりの収入があるという。
庭には鶏が数羽、餌をついばんでいて、若い女がぼんやり、それを眺めていた。
るいがみたところ、江戸へ出て来たばかりの頃のおたまに少し似ている。
「お梅さん」
と吾市が呼んだ。
「江戸から、おたまさんの奉公していた先の御主人がみえられただが……」
お梅はふりむいて、こっちをみたが、そのまま、ばたばたと家の中へ走り込んだ。
奥から出て来たのは、初老の僧と中年の女であった。
東吾が近づいて、江戸の「かわせみ」の主人夫婦である旨を名乗り、おたまの不慮の死の知らせをもらい、とりあえず香華をたむけるために来たことを告げた。
「それは、御遠方からわざわざ……」
僧が数珠をつまぐり、吾市にすすぎの水を汲んでくるように命じた。
「手前は、この村の玉泉寺の住職で鎮守の別当をつとめて居ります瓊雲と申します」
中年の女は、お梅の母のお辰だと紹介した。
「まず、お上り下さい」
住職に勧められて、東吾とるいは家へ上り、仏間へ入った。
それほど立派なものではないが、がっしりした仏壇にまだ新しい位牌が二つ、並んでいる。線

香を供え、合掌してから東吾はお辰のほうをむいた。
「その後、下手人は判明したのか」
お辰がうつむいて、袖口を目に当て、住職が代りに答えた。
「まだ、お縄には出来ませぬようで……」
お梅が急に泣きじゃくった。
「あたいが悪いんだ。あたいの代りに姉ちゃんは……」
母親が娘の背を撫でながらいった。
「ここの家は何かに祟られているんですよ。うちのが死んで、間なしにおたまがこんなことになるなんて……」
住職が母娘をなだめ、東吾とるいは夏の風が吹き通る縁側へ出て、吾市が運んで来た冷たい麦湯を飲んだ。

二

玉泉寺へ帰るという住職に東吾とるいがついて行ったのは、寺の墓地におたまの墓があると聞いたからで、かんかん照りの田舎道は歩く度に白く土ぼこりが上る。
「念仏踊りと申すのは、何刻頃から始まったのですか」
東吾の問いに、住職は笠の下の汗を拭きながら答えた。
「あれは夕刻からで、左様、暮六ツに太鼓を打って始めるのです」

もともとは疫病退散の呪いの踊りだったが、いつ頃からか盆の行事になってしまった。
踊り子が若い娘なので人気がある。
「村中が総出で境内に集って夜半まで騒ぐので、年に一度のたのしみになって居ります」
「すると、この道なぞは鎮守へ出かける村人が大勢、通行していたでしょうな」
村道の両側は田畑、それに林が点在している。
「いや、この道を来る者はさほど多くはありません」
清川村は鎮守の社の南と西側に多く人家が集っていて、北側に当るこの辺りには三軒ほどしか家がない。
その一軒がおたまの実家で、もう一軒は病人がいて祭どころのさわぎではない。
残る一軒が「かわせみ」へ使に来た吾市の家だが、
「あそこは今年が年番で一家中が朝から鎮守の社へ手伝いに来て居りました」
おたまの家は、父親の忌中でお辰は家にこもって鎮守には出て来なかった。
「本来なら娘も忌中でござるが、何分にも年に一度の盆祭で若い者が集るのに、閉じこもっているのも可哀相で……父親の百カ日も済んでいることだからと手前が申しまして、お梅は踊り子に出る、姉のおたまも祭見物に来る筈でござった」
従って、六ツからの念仏踊りの見物に、この道を通る者は、考えてみるとおたまとお梅の姉妹しかなかったことになる。
「南や西のほうの村人が、こちらに用事でもあって来ていれば別でございますが……」

話している中に、住職が不安そうな表情になった。
つまり、おたまを殺した者はあらかじめ、ここを通るのが姉妹、或いは念仏踊りに出るお梅だけであることを知っていて、待ち伏せしたと考えられるからである。
やがて、閻魔堂の前へ来た。
堂のまわりは林になっていて炎天下を歩いて来た者が一息つくには具合のいい場所であった。
堂の横には井戸もある。
「十何年か前までは、堂守りが住んでいて、小さな小屋がありましたが、歿りまして後に小屋はこわしてしまいました」
井戸だけはそのままになっている。
東吾がのぞいてみると、かなり深い。
井戸の蓋や釣瓶は清川村で修理したり、新しくしたりしているといった。
「清川村の者でこちらのほうに田畑を持っているのが何人か居りまして、弁当をつかったり、なにかとこの井戸を使うことが少くございません」
ためしに東吾が水を汲み上げると、冷たく澄んでいる。
住職が手拭を絞って顔を拭いている中に、東吾は閻魔堂の裏へ廻ってみた。
草がふみ荒された場所がある。事件のあと、雨が降ったらしく、血は大方洗い流されていたが、それでも草の根や土に変色が残っていた。
暮六ツの祭に出かけるのであれば、念仏踊りの衣裳を着たおたまがここを通りかかった時は、

まだ明るかったと思われる。
再び村道へ戻って歩き続け、漸く玉泉寺に着いた。
住職が寺男に命じて蕎麦の用意をさせてくれた。
「お辰というのは、しっかり者の女房でござったが、今度のことでよくよく参ったようでして……」
昨日が殺されたおたまの初七日だというのに、寺へ来なかった。
「仕方がないので、今朝、こちらから出むいたところ、ひどい頭痛で二日ばかり床についていたとか、お梅のほうはなにをいっても泣くだけで、当分、あの家は立ち直れますまい」
蕎麦が出来る前に、墓地へ行った。
おたまは父親の与兵衛と隣合せの墓の中でねむっている。
墓地の先は鎮守の境内につながっていた。
神楽殿の前が広場になっていて、念仏踊りはそこで行われるらしい。
行ってみると、神楽殿の手すりのところに念仏踊りの衣裳が何枚もかけてあった。
「衣裳も花笠も頭巾も、神社のほうにおいておくのです。念仏踊りの踊り子に決りますと各々、一組ずつ当人に渡しまして……」
当日、踊り子は家で着替えて神社へ集って来る。
東吾が白い頭巾を手に取った。
「これをすっぽりかぶると目と鼻ぐらいしか見えませんな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com